同志社田辺校地とその周辺の遺跡　(7)

田辺町内の奈良時代寺院址

鈴木重治

考古学的に確認される山背（城）国の寺院跡は、現在のところ一一五カ所あって、そのうち奈良時代の遺構・遺物が知られているのは三二カ所である。

田辺町内では、普賢寺跡のほか興戸廃寺、三山木廃寺の三カ所から奈良時代の遺物が出土しているが、いずれも発掘調査がおこなわれていないこともあって、当時の伽藍とその配置などはあきらかでない。

寺院址に囲まれる同志社

同志社の田辺キャンパスの北側にある興戸廃寺、南側にある三山木廃寺は、それぞれに防賀川、普賢寺川を挟んで低丘陵の裾や低丘陵上に立地し、興戸山添、宮津佐牙垣内にあって、ともに当時の官道を東側に走らせている。さらにその東側を蛇行しながら北流する木津川に注ぐ河川の一つが普賢寺谷を開析して、南山城から河内へと抜ける重要な道沿いに東流している、普賢寺川である。そのほとりにある普賢寺集落の中心が現在の観音寺大御堂であって、同志社キャンパスがその東側に隣接している。奈良時代の普賢寺跡が、大御堂とその周辺にあったことは、考古学的にも確認されている。

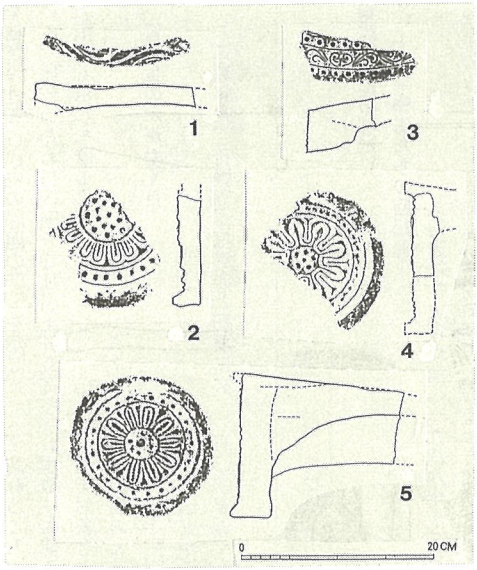
つまり、田辺町内で知られている三カ所の奈良時代寺院址のすべてが、同志社キャンパスに隣接していることになる。別の言い方をすると、近鉄の三山木駅の近くにあった奈良時代の山本（やまもとのうまや）駅を含めて、同志社田辺キャンパスの周辺は、南山城の中でも重要な位置を古代において占めていたことになる。

普賢寺跡、興戸廃寺、三山木廃寺のうち、現存の資料でみるかぎりとりわけて重視してよいのが普賢寺跡である。興戸廃寺や三山木廃寺が平安時代以降に姿を消したのに対して、普賢寺の場合は観音寺として今に法灯を守っているばかりか、天平の乾漆佛として知られる国宝の十一面観音像が現存するのに加えて、当時の塔心礎や古瓦などの考古資料で裏付けられるからである。しかも、考古学的には多くの未解決の課題をかかえている点でも魅力的でさえある。

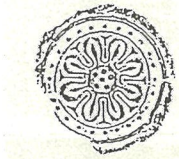
塔心礎と古代瓦

南山城に残る塔心礎のうち、発掘調査によって飛鳥時代までさかのぼることが確認されているのは、山城町にある高麗寺の例であり、初期仏教寺院の遺例として注目さ

れている。この心礎は、佛舎利を納めていたとする小龕が、心礎本体の南側に面した位置に彫りくぼめられている点でも、特異な資料とされている。このほか加茂町に残る山城国分寺址の塔心礎は、基壇や礎石群とともに良好な保存状態をとどめていることで知られており、ともに創建当時の位置を確認することができる。



普賢寺址出土の古瓦


丹後国分寺址出土の古瓦

田辺町の普賢寺の塔心礎は、周辺に古瓦を散在させながら丘陵頂部の南端に、普賢寺川を眼下にしながら藪の中に現存するが、すでに当初の位置から動かされた情況にある。このことは、古い写真と違って礎石中央上面に彫られた円孔が水平面に対して九十度近くも変化していることからもうかがえる。創建当初の位置から動いていることはあきらかであるが、それでは元の位置はどこかというと、これまたわからないのである。心礎以外の礎石群の確認が、地表の観察では出来ないからであって、西側に続く平坦部の中に埋もれていることが予想されながら確定されていない。発掘調査に期待されるわけだが、地表での電気探査も有効な方法であるに違いない。いずれにしろ、他の伽藍配置とともに塔址の位置の確定も、奈良時代寺院址としての普賢寺址の検討課題の一つである。

丘陵上に散在する古代瓦は、布目や縄目の痕跡をとどめる平瓦が圧倒的に多いが、本堂内に収蔵されている採集された瓦の中には、注目してよい軒平瓦や軒丸瓦が保管されている。拓影図に示したものはその一部である。1と2が白鳳時代のもので、3、4、5が奈良時代のものである。

奈良時代の軒丸瓦のうち、4の資料は特に重視してよい。それは、南山城の古代瓦の中でも普賢寺址以外に類例の知られていない日本海側の丹後国分寺址出土瓦と同型だからである。この事実は、南山城と丹後

を結びつける古代史の課題の一つを示している。比較のため丹後国分寺址出土軒丸瓦の拓影も示して置こう。

留学生のかがやく目

ここ数年来、普賢寺へは春先と初夏に必ず訪れることにしている。東大寺二月堂のお水取りに使う大松明の竹送りの際と、留学生を対象とする授業の史跡見学と考古資料の観察のときである。同志社大学に留学してくる学生の大半が、初めて目にする日本国の国宝がここの十一面観音であり、一三〇〇年近くも地域住民が信仰の対象として守り続けてきたことに、感銘し、素直な驚きを示すのも無理のないことである。

十一面観音像や、足許に散在する古瓦を見つめる留学生の目は、誰の目もかがやきを増し、生き生きとしている。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）

『創設期の同志社――卒業生たちの回想録――』

（同志社社史資料室　一九八六年十二月）

学生のなかにもたまには、初期の同志社のことを知りたいと言ってくる者がいる。また、学生生徒を対象にして、初期の同志社の話をすることもある。そういうとき、文献としてまずあげるのが、この『創設期の同志社』である。

四四〇ページにおよぶ本だから、尻込みする者もいるけれども、今部読みなさいと言っているんじゃない、と言ってやる。収録されているのは、安部磯雄、深井英五、海老名弾正ら、英学校に学んだ四十六名。湯浅初子ら女学校に学んだ十五名。これらのうち、関係がある人の項目から読めばいいのである。

勧める理由は、読みやすくて、しかも面白いからだ。構えて書いた堅苦しい歴史叙述ではなくて、ざっくばらんに在学時代の思い出を語った談話を要約筆記したものだからである。

彼らはいと楽しげに、寮、授業、娯楽、食事、宗教活動など、当時のいわゆるキャンパス・ライフを語る。関連して新島襄、デイヴィス、ラーネッド、山崎為徳らをはじめとする教員たちの思い出を語るのである。すべてが生き生きとしている。

面白くて読みやすく、しかも従来あまり明らかでなかった初期同志社の側面がえがかれていて、資料的価値も高い。

だれよりもまず、学生生徒諸君にぜひ読んでもらいたい本である。

（頒価一五〇〇円、同志社収益事業課扱い）